連載 障がい者雇用KEYWORD ④

おかげさまで10周年

- 2004年7月　NTTクラルティ株式会社設立
- 2005年4月　NTTクラルティ事業開始（企画部（現:企画総務部）、業務部（現:営業部））

- 2005年6月　特例子会社として認定（NTTおよび持株グループ11社）
- 2006年8月　業務企画部（現:フロントサービス部）事業開始（綾瀬センタ、中山センタ）→料金問合せ受付業務
- 2007年6月　グループ連結で障害者法定雇用率（1.8%）を達成
- 2008年3月　NTT東日本グループ25社を連結拡大し特例認定が36社へ
- 2009年1月　プライバシーマークの認定を取得（登録番号:10861786）

- 2011年6月　塩山ファクトリー事業開始→手漉き紙製作業務
- 2012年4月　札幌サービスセンタ事業開始→情報機器保守サービス勧奨業務

- 2013年9月　社外広報誌「CLARTE（クラルテ）」を創刊
- 2014年4月　ウェブアクセシビリティ業務強化に向けメディア開発部（現:営業部）にアクセシビリティ推進室、経営企画部（現:企画総務部）に新規事業推進担当（札幌）を新設
- 2015年2月　塩山ファクトリーサテライト（駅前フロア）を開設

NTT CLARTY

10th

ANNIVERSARY

NTTクラルティは2015年4月に、事業を開始してちょうど10年を迎えます。
弊社事業について、ご理解・ご愛顧いただいているお客様、
そして支えていただいている全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。
これからも皆様に感謝しながら事業の継続的拡大に努め、
障がいのある方々の活躍の場を創出・拡大し、
一人でも多くの障がいのある方が
宝石のように多彩に輝ける会社を目指してまいります。

NTTクラルティからのご案内

公式ホームページをリニューアルしました!

情報の優先度や役割を意識し、アクセシビリティにも配慮したページにリニューアルいたしました。会社の特徴をさらに魅力的に伝えます。

試験対象範囲においてJIS規格の達成等級AAに準拠

【変更内容】
- ●ユーザビリティの配慮（写真等の活用）
- ●画面サイズの拡大
- ●ナビゲーションの変更 等

会社紹介映像もご覧いただけます

社員一人ひとりが、業務や障がいに配慮された職場環境をお伝えしています。ぜひ、アクセスしてみてください。
http://www.ntt-claruty.co.jp/

NTTクラルティ
NTTクラルティ広報誌「クラルテ」第4号／平成27年3月20日発行
発行・編集:NTTクラルティ株式会社　東京都武蔵野市緑町3-9-11
「クラルテ」にご意見やご質問などがございましたら、ぜひお寄せください。
http://www.ntt-claruty.co.jp/
NTTクラルティ　検索

CLARTE

Vol.04
NTTクラルティ広報誌［クラルテ］

「クラルテ」は、フランス語で「光り輝く」の意味。障がい者も健常者も「光り輝く」社会を目指して障がい理解と障がい者雇用を推進する、わたしたちの活動をご紹介いたします。

写真：岸本 剛

対談 金澤泰子（書家）×前田麻利子（NTTクラルティ）

障がいを持った子と、その親。親が子を思う気持ちと、子が親を思う気持ち。すれ違っても、いつかはひとつになる。ダウン症の書家・金澤翔子さんの母であり、自身も書家である金澤泰子さん。母親との葛藤を乗り越え、関節リウマチと向き合う、NTTクラルティの前田麻利子。二組の親子の、心のつながりを考える。

奇跡が重なって生まれたダウン症のわが子

金澤　翔子は、私が42歳の時に産んだの。初めての子で。予定日の一週間前に帝王切開をしたら、仮死状態だった。

前田　ということは、帝王切開をして、結果的にはよかった、ということですか?

金澤　そうなんです。翔子が生まれるまでには、いくつか奇跡のようなことがあったんです。予定日が近づいてきた時、私は帝王切開することを選んだ。そうしたら、翔子は仮死状態だった。もし自然分娩を待っていたら、翔子は生きていなかった。

前田　私自身、関節リウマチという病気があって、今でも関節の動きに障がいがあるのですが、それでも、生まれてきたお子さんに障がいがあったという、その時のお母様の気持ちは、想像しようとしても、とてもできないです。

金澤　想像を絶しますよね。その時のことは覚えていますよ。本当に涙に暮れて。42歳までは幸せだったんです、私。やりたいこともやった、欲しいものも手に入った。42歳で「おめでたです」って言われた時は、体がポッと熱くなるほどうれしかったのを覚えています。一番欲しかった子どもが手に入る、と思って。意気揚々と出産したんです。でも、生まれてきた子にはダウン症があった。

最初は隠されていて。翔子は敗血症を起こしていたので、違う病院に連れて行かれて、その間、50日近く隠されていて。知らされた時には、「この子には知能がないだろう、多分歩けないだろう」と聞きました。もちろん今では、そんなことないってわかっているんですけど。でもその時は私、背筋がすーっと冷たくなって。ベッドの脇にズルズルってしゃがみ込んでしまったのを、覚えています。

ショックが大きかった。鉄槌だと思いました。その瞬間から自分を責めて、自分の人生の悪いところばっかり考えちゃうんですよ。あんな悪いことした、あの人にひどいことをした、って。そんなことの鉄槌というか。でも「ここで子どもに来ることはないじゃないか」って思って、神様に。鉄槌は、私に来ればいいのに、なんで子どもに来たのか。そのことで、苦しみましたね。

なんで私ではなく、子どもに来てしまったのか

前田　今、お母様の話を聞いていて、母が全く同じことを言ったのを思い出しました。関節リウマチだとわかった時、私はあまり実感がわかなかったのですが、家に帰ったら母が、自分の部屋でシクシク泣いているのがわかって。なんでこんなに泣いているんだろうと思ったんですが、その時母が言っていたのが「なんで麻利子に来ちゃったの」という言葉でした。

金澤　本当、そうなのよね。

前田　「来るんだったら、私に来ればよかったのに」と、母が言っていたのを覚えています。

金澤　ダウン症って、少なくとも今の医学では治らない。だから神様に、奇跡で治してくださいってお願いするしかない。私の持てるものは全てあげます、と。私の命と引き換えでも構わなかったです、翔子が治れば。祈るしかなかったんです。でも、どんなに祈っても治らない、奇跡は起こらない。

だから「死ぬしかない」って思ったんです。はじめのうちは、ダウン症であることを周囲に隠して育てていました。この子を残して私が先に死んでしまったら、もうどうしようもない。でも、一緒に死のうと思っても、なかなか自分で死ぬことはできない。衰弱死させられるんじゃないかと、翔子にミルクを薄めて飲ませたりもしました。そこまで精神的に追い詰められていたということなんですけど。

翔子が私の頬をつかんで拭ってくれた「涙」

金澤　でも、ここが翔子のすごいところなんですけど、私が泣きながら薄いミルクをあげようと、翔子を抱っこするでしょ。そうすると、私の頬をしっかりとつかんで、私の涙を拭ってくれるの。それで、ニコニコしている。この笑顔が、本当に私を救った。ここで私と翔子は深く強く結ばれた、そういう実感がありました。障がいがある子だからこその、深い絆で。

前田　それは、とても強い絆でしょうね。

金澤　もちろん、祈っても祈っても奇跡は起こらないし、苦しかったですよ。でも、どうにかして生きていかなければ、と心に決めて。それで、翔子を保育園に通わせたんです。保育園では、まだ小さいから、みんなと一緒になって過ごすことができました。そして、小学校で普通学級に入れていただいた。これがすごくよかったですね。お友達もすごくたくさんできました。担任の先生に「翔子は何をやってもビリ、すごく手数のかかる子をおあずけしてごめんなさい」って言ったら、先生が「金澤さん、いいのよ、翔子ちゃんがいるとクラスが穏やかになって、優しい子が増えるから」って。翔子は、ビリもトップもわからないから、よろこんでビリをやっているわけです。そうするとクラスで成績がよくない子が、落ち着いたりする。はじめてその時、翔子の存在が認められた、と思えたんです。翔子がビリをやっていれば、クラスが落ち着くなんて、素晴らしいじゃない、と思って。翔子だって居場所があるんだと思えて、それで翔子はずっとビリで構わない、って覚悟したんです。もっと勉強すれば、とか、頭のいい子に、なんて一切考えなかった。

苦しさの中で始めた般若心経に落ちる「涙」

金澤　でも、その学校には特別学級がなかったので、学年が上がった時に、遠い学校に移らなければいけなくなった。先生にも相談したんですけど、いろいろ条件があって。それで学校をやめて、二人でしばらく家で引きこもってたんです。

前田　つらい、苦しい時期だったんですね。

金澤　とても苦しいですよ。友達もいないですし。こんなにうまくいっていたものをなんで否定されるのか。

苦しくて、その一方で時間は無限にあるわけです。それで翔子に、般若心経の作品を作らせようと思いたちました。悔しい思いを吐き出すために。あの難しい、272文字を作品にしようって。朝から晩まで書かせたんです。般若心経は健常の子にも難しいですけど、それでも書かせた。親子っていうのは優しくなれないのね。愛情が深いから。どうしてこんなことできないの、とか、まだこんなことやってるのとか、なぜ曲がったの、とか。すごく怒っちゃうの。

親を助けようと思って、喜んでもらおうと思って、書いた。だからここで書家の基礎ができた。すごいことですよ。

苦しい時には、必ず活路が見えてくる。もし翔子が、普通学級にそのまま通っていたら、般若心経は生まれない。書家になっていないでしょう。10歳で3000字、あんな難しい文字を叩きこまれて基礎が身についたから、今の翔子がある。だから翔子との30年間で私が学んだのは「闇の中にこそ光はある」ということ。

前田　彼女にとって、お母様が悲しんでいるっていうのが、一番苦しかったんだと思います。お母様が泣かれている時に自然と手が出てきたっていうお話がありましたけど、親が悲しんでいるとか、表情とか、子は敏感に感じ取る。私は親を悲しませるような行動をしてしまったということもあるんですけど、今でもずっと後悔し続けているんです。やっぱり子どもって、ずっとお腹の中にいたというのもあって、母親への思いは誰よりも強いんですよね。母が悲しんでいる顔っていうのは、子どもにとっては一番つらい。きっと翔子さんも、お母様が、書ができた時にすごく喜んだと思うんです。それが嬉しい。

金澤　そうそう、そうね。

前田　そこからどんどん書が好きになったり、書をしていくことで、みんなが喜んでくれるっていうことに幸せを感じているんじゃないかなって思います。

前田　厳しいですね。

金澤　厳しくなっちゃうんです。どうでもよくないから。必死だから。今ここでなにかをやらなければ、私も収まらないから。翔子は叱られても、イヤだとか、もうやめたいとか、やめて、とか言わないの。叱られている状態が悲しくて、泣くのよね。はらはら涙が落ちるんです、作品に。それでも一行書き終わったら休まなきゃいけない、書いた文字を乾かすために。その時必ず「ありがとうございました」って言うの。すごくいい子なの。そんな翔子に私も引っ張られて、10組ほど書かせたんです。全部でおよそ3000字を、楷書で書かせたので、今翔子はどんな字が出てきても、書ける。翔子は母

覆いかぶさってきた母の私の頬を濡らした「涙」

金澤　本当にそうですね。だから、わたし、親孝行しなさいっていう言葉はいらないって思います。親孝行なんかしなくていい。当たり前なの、親と子の関わりって。子は親を、親は子を、すごく思うもん。まして障がいがあったりすると、その結びつきっていうのはすごいですよ。

前田　私が病気になった時に、母は、この病気に効くんじゃないかという、ありとあらゆることをしてくれました。

金澤　親の思いも、それを受け止める子どもも、すごいでしょ。私は翔子の障がいを受け入れたし、受け入れたことを子どもはわかるもんね。

前田　はい、わかります。すごくわかります。私は、親を悲しませちゃいけないって思いながらも、自分の病気のことを誰にあたっていいのかって言った時に、親にしかあた

れなかったんですね。自分からするとある意味愛情表現なのかもしれないんですけど、言ってはいけない、傷つけてはいけないはずなのに、その言葉を言ったら母が傷つくとわかっていながらも、どうしても自分の病気を受け入れることができなくて、それを親にぶつけてしまったということがありました。

もちろん、親も悲しんでいました。私自身も自暴自棄になって。寝ていても起きていても、ずっと痛いんです。お手洗いにも連れて行ってもらわないといけないので、つらい、情けないという思いもありました。

一度誰も呼べなくて、お手洗いが間に合わなかった時があったんです。とても悲しくなってきてしまって。痛みとともにもう、生きているのが辛いと。もう死にたいと。その時はじめて母親が「わかった」と言って、覆いかぶさって首を絞めてきて。ああ、そのまま死ぬんだな、っていう中で、自分の頬がポタポタ冷たくなるのを感じて。なんで濡れてるんだろうってパッと見ると、母が泣いている。私に「ごめんね麻利子、ごめんね」って。「一人に絶対しないから。私もこの後行くから」って言ってるんです。それを見た時に「なにをやっているんだろう、私は」って。

そこでようやく本当の意味で自分の置かれている状況が受け入れられた。自分自身の障がいや、治らない病気と一緒にこれからどうやって生きていけばいいのか向き合わなくてはいけないということを、母に教えてもらった。そこからは生き方が変わりました。面白いことに、痛みも変わるんですよ。

金澤　そうなんですか。

前田　はい。もちろん痛みがなくなるということはないです。痛みの捉え方が変わってくるんですよね。痛くてどうしようもないのではなく、痛みに負けない自分が出てくるんですよ。自分自身が病気に打ち勝とうという気持ちが出てきて。

そのそばには必ず母親がいてくれたんです。入院した時も、ずっと母も仕事をしながら、毎晩来てくれるんです。自分が今ここで仕事をできているのも、母がいるからです。だからといって、あえて親孝行をしようとは思っていなくて。私が今生きていて、自分自身がやれることを精一杯やっていくことが、母が笑顔でいてくれることだと思っているので。私が障がいに向き合いながら、毎日楽しく笑って暮らしていることで、母は幸せになってくれるのかなって。

金澤　その心境は、やっぱり障がいを乗り越えたからですよね。二人でね。

苦しさの中でこそ光が見えてくる

前田　障がい者になって、ある意味私は幸せだったって思っています。なぜかというと、私は小さい頃からおてんばで、天真爛漫で、歩けること、食べることって、当たり前だと思っていたんです。

でも、病気になってわかったんです。「できる」ことって、当たり前じゃなくてすごく幸せなことなんですね。考え方も変わりました。自分のことよりも、周りの環境に支えられているんだって考えるようになりました。

金澤　明るい中で光は見えないけれど、苦しくて苦しくて、明かりがあるわけじゃないけど、この苦しさをずーっと貫いていくと、いいところに出るのよ。

前田　本当にそう思います。

金澤　光は見えないですよ。見えないから、もがき苦しむんだけど、その苦しみが深ければ深いほど、闇が深ければ深いほど、いいものが出てくるのよ。うまくいっていれば明るいけど、大きな光は見えないじゃないですか。

今、翔子が書家って言っていただけるのならば、それは、苦しい時に、書しか救ってくれるものがなかったからです。翔子が大きく伸びたのは苦しい時です。全てがうまくいっていれば、書家になっていないですよ。楽しい子だから、楽しくやってるとは思いますけれど。だから、よく親たちが、うちの子は成績が悪いだのなんとか言うけど、なんなのよそれが、って思うのよ。

前田　（笑）

金澤　暴れようが、どうしようが、「なんでもないよ、お母さん」って、そう思うもん（笑）。

前田　ほんとうにそう思います。

金澤　だから、前田さんは、いい経験をしましたよね。そういう意味では。全部尊いと思えますもん。どんな人でも一生懸命生きていて尊いんだ、っていうことは、知らなかったよね。

前田　その通りです。知りませんでした。

金澤　すごいつらい経験だったようだけど、今思うと笑い話。よかったよね、きっと。私も翔子がダウン症でよかったと思えますもん。

前田　ほんと、よかったです。すごくいい経験をしました。

金澤　これはとっても大切なことなんだけれど、私は翔子と一緒に苦しんできたと思っていたんです。でも10年ほど前にわかったんですけど、苦しんでいたのは私だけで、翔子はちっとも苦しんでなかった。翔子はダウン症のことなんてちっとも嘆いていないし、比べることもないから、自分がみんなよりできないとも思わない。苦しかったのは、親の私が他人と比べたり、自分の思うような子ではないと考えていたから。希望は普通の子にも障がいの子にも、同じように用意されているんだって、今になってわかるんです。

翔子から見れば、いい世界に生きてるのに、効率とか生産性ばかり追い求める私たちの社会から見ると、能力の低い子に思えてしまう。でもIQなんか低くたって、違う知性がちゃんと育つものなんですよ。今は、素晴らしく充実した、豊かな時間を生きています。

だから、そういう翔子が書くから、いいんじゃない？　私達みたいに、観念的に、ずっと何十年も練習して、ああでもない、こうでもないって悩んで、いっぱい書いて、さあどうだって出す作品よりも、翔子はいきなりみんなの前で書いて、感動を与える。人に喜んでもらいたい、母親に喜んでもらいたいだけで、何でもやってくれた。「自分がない」って、すごいパワーだな、って思う。不思議。本当に、翔子には不思議がいっぱいあるんです。

金澤 翔子（かなざわ しょうこ）
ダウン症の女流画家。1985年東京生まれ。5歳のときより母・泰子さんに師事し書道をはじめる。20歳で銀座書廊において初の個展を開催。その後、建長寺、東大寺、中尊寺などで個展を開催。厳島神社などで奉納揮毫。2012年のNHK大河ドラマ「平清盛」の題字を揮毫。2013年に国体開会式において巨大文字を揮毫。紺綬褒章受章。天皇御製を謹書。2015年3月、「世界ダウン症の日」にニューヨーク国連本部にて日本代表としてスピーチ予定。

かなざわ やすこ
ダウン症の書家・金澤翔子さんのお母さん。1943年生まれ、明治大学卒業。書家の柳田泰雲・泰山に師事。1990年、東京・大田区に「久が原書道教室」を開設。著書に『愛にはじまる』ビジネス社、『天使の正体』『天使がこの世に降り立てば』かまくら春秋社、『翔子の書』大和書房、『涙の般若心経』世界文化社、その他多数。久が原書道教室主宰。東京芸術大学評議員。

まえだ まりこ
NTTクラルティ営業部勤務。中学2年のときに、関節リウマチを発症。短大・専門学校を卒業し、一般企業に就職が内定・働き始めたものの症状が悪化。全身に激しい痛みが起こり、手足関節の変形が急激に進行。ほぼ動けない状態になり、会社を退社し約2年間自宅療養に入る。手術や投薬等の治療により、仕事に復帰。2006年NTTクラルティに入社し、今に至る。

ピッチ上で繰り広げられる、激しい「チェス」。

【ブラインドサッカー】

ブラインドサッカーの試合を見に行きました。ブラインドサッカー関東リーグの最終戦。「乃木坂ナイツ 対たまハッサーズ」。優勝が懸かった一戦です。とても興味深い体験になりました。

静寂の中で、「シャカシャカ」と音がする。するやいなや、一斉にいろんな方向から指示の声が飛ぶ。「壁、壁!」「もっと下がって」「2メートル左!」。その指示を受け(あるいはその指示にかかわらず、自分で判断して)、プレイヤーが動く。しばらくすると、また静けさが訪れる。そんな耳に聴こえてくる「風景」と比べて、目に見えてくるものは、もっと激しい。体のぶつかり合いは当たり前。ピッチの両サイドには腰の高さくらいの壁が立てられているのですが、壁際での競り合いは相当激しい。時には壁から外に飛び出してしまう選手もいます。

「ブラインドサッカー」は、主に視覚障がい者がプレーする5人制のフットサル。シャカシャカとなる鈴が入ったボールを使い、フィールドプレイヤー4人は、アイマスクをしてプレーします。ゴールキーパーは、アイマスクをせず健常者がプレーする他、2人の健常者(フィールド外のセンターライン付近のコーチ、相手のゴール裏のガイド)が指示を出すことができます。2014年は、東京で世界選手権が開催され日本は12チーム中6位。パラリンピックの競技にもなっています。

不思議な気持ちを抱えながらしばらく見ているうちに、ブラインドサッカーの面白さが、だんだんとわかってきました。いうなれば、ボードゲーム、将棋やチェスの感覚。味方も、敵も、全員が視覚情報を持たない中、すべてのプレーは頭の中、イメージによって判断され、イメージによって次のプレーが決められるのです。相手も見えていない、ということも考えた上で、どう動くか。次の一手を読みながらのプレーは、激しさを兼ね備えた「チェス」のよう。観客には、彼らの頭の中でどんなイメージが生まれているのか想像し、実際の展開を見て、その「答え合わせ」をするような楽しみがあります。

「たまハッサーズ」の田中章仁選手。NTTクラルティーではウェブアクセシビリティー推進室の一員です。チームではディフェンダーの要、ブラインドサッカー日本代表もつとめます。田中選手のプレーを見ていると、ポジショニングの良さに驚かされます。ボールが転がっていくその先に必ず回り込んでいて、きっちりとボールを受ける。あるいは切り込もうとする相手の前に立ちふさがり、進路をふさぐ。簡単なようですが、他のどの選手よりも正確に、素早くできていることで、相手チームの攻撃の芽を摘み、自チームの攻撃の起点となっていました。

前後半25分ずつ。あっという間の50分が過ぎ、試合は0-0の引き分け。両チームともに優勝を逃すという残念な結果に。試合後悔しがっていた田中選手ですが、いやいやどうして。スポーツ観戦の、新しい楽しみ方を教えていただきました。

日本ブラインドサッカー協会
http://www.b-soccer.jp/

写真:岸本 剛

CLARTE *PEOPLE 1*

奈良発・アート＋福祉を広げる拠点

－開発から流通まで、障がい者アートビジネスのハブとなる施設－

Good Job! センター
http://tanpoponoye.org/category/news/goodjob/

施設長の成田 修さん

「たんぽぽの家」は、「アート」をキーワードに、障がいのある人の社会進出や仕事づくりを支援してきた、歴史ある団体です。奈良県を拠点に、全国でイベントやセミナーを開催、また東京では、秋葉原にある「アーツ千代田3331」に「エイブルアート・カンパニー」として事務所を構え、障がいのある人のアートマネジメントなども事業化しています。

2013年からは「Good Job!」展と銘打ったエキシビジョンを開始。北海道・東京・愛知・福岡・兵庫の5会場で開催された2014-2015年の展覧会は、展覧会自体に企業と福祉施設、障がいのある人のアートと、地域の企業や産業の出会いの場としての役割を持たせて、多くの商談やコラボレーションの機会を創り出してきました。

その「たんぽぽの家」が、2016年のオープンを目指し現在建設計画中なのが、「Good Job! センター」です。「Good Job!」展のテーマである「障害のある人たちのARTと社会的なINNOVATION」を本格的に実現するための拠点として、福祉と社会との関係性に新しい風を吹き込んでくれそうな「Good Job! センター」の狙いと展開について、たんぽぽの家施設長・成田修さんにお話を聞いてきました。

「Good Job! センター」の一番の特色は、流通部門を持ち、製品の販路まで考える、というところにあります」と成田さん。センターの主な事業は、障がい者アートを活かした製品の製造・開発／流通／営業・販売。それらを通じて、「モノづくりを通した協働の場づくり」を目指します。近年では、障がい者福祉の現場でのものづくりに「デザイン」の考え方が浸透しています。時には有名なデザイナーを起用し、高いクオリティの製品も生まれています。もちろん「たんぽぽの家」はそうした流れの先駆的な存在であり、クオリティの高いものづくりを支援し、時には自らも携わってきました。「中間支援者として、施設のものづくりを支援・コンサルティングする立場の人たちは、増えてきました。次の課題は、そうしてできたクオリティの高い製品を、どう消費者の手に届けるか、だと思います」と成田さん。在庫を持ち、全国の施設の商品を集めておくことで、商品ラインナップを充実させ、イベントなど突然の商機にも対応できる体制を作ります。

「Good Job! センター」は新たに立ち上げる就労継続支援A型事業所が、運営に携わります。在庫管理をはじめとして、イベントの設営や販売事業などを、障がい者が担当します。

センターの運営自体も、障がい者の仕事づくりにつなげます。ここから生まれる、障がい者アートビジネスの新しい流れに、期待が膨らみます。

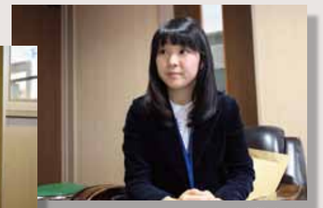
CLARTE *PEOPLE 2*

就業支援センターを知っていますか?

－社会に出る障がい者を支援するコーディネーター－

山梨県立就業支援センター
http://www.pref.yamanashi.jp/shugyo/

センター長の斉藤 進さん



スタッフの齊藤みなみさん

特例子会社や就労継続支援事業所など、障がい者を直接的に雇用したり支援したりする組織・施設が、障害者雇用の「現場」だとすると、意外と知られていないのが、「現場」をサポートする「中間支援者」の存在。障害のある人と企業や事業所をつないだり、また地域の中で障害のある人の職域を広げたりと、大きな役割を担っています。そんな組織の一つ、「山梨県立就業支援センター」の斉藤 進所長とスタッフの齊藤みなみさんに、仕事の内容とやりがいについて聞きました。

「山梨県立就業支援センター」は職業訓練を行う施設で、障がい者に対して行っている事業は、大きく以下の3つがあるといいます。①センター内で企業就労に向けた販売実務訓練などを行う「総合実務科」、②センター外の訓練機関で就労に役立つパソコンスキルなどを身につける「知識・技能習得コース」、③就労を前提とした職場実習である「実践トレーニングコース」。齊藤さんは3事業全てに携わりながら、調整をしています。「就労や訓練受講を希望される方が来所されたらまず、その人のニーズや能力、社会性などをふまえて、訓練のプランを設定します。訓練開始後は、週に1回程度、様子を見に行き、必要があればプランを修正し、スムーズに就労に結びつけていきます」。今年は、のべ70人近くを担当したそうです。

「学科や実技指導など専門的な部分は、担当されている先生にお任せして、私は日常的な会話やふれあいの中から、訓練生のニーズや思いを汲み取って、先生に伝えるように気をつけています」。授業以外の、なにげない会話の中に本音が隠れていることもあるんです、と齊藤さん。その本音を訓練の現場にフィードバックして、よりよい支援につなげていくのも大事な役目。

「3年間、福祉の現場で働いていましたけど、ここで一歩現場から離れた立場で携わってみたいと思ったんです。ここに来て、自分の視野が広がりました。それまでは施設内の利用者さんを支援するので精一杯だったので、周囲の支援機関さんや、就労先の職場まで意識が回りませんでした」。

障がいのある人の働く場をつくる意味では、地元の企業との連携も重要になります。障がい者雇用の経験がない事業主に、障害者雇用についての理解を深めてもらえるようにするには、その企業の業務を理解し、適切な雇用のありかたを提案する、いわばジョブコーチ的な動きも求められます。「経験のない事業主さんにチャレンジしてもらうには、積み重ねが大事です。今、雇用に結びつかなくても、つながりは作り続けていきたい」。「支援したい」という思いの強い事業主さんは少なくない、と齊藤さん。その思いに応えることができれば、障がい者の働く場は、もっと広がっていきます。

「たとえ苦手なこと、できないことがあっても、住み慣れた地域で、その人がその人らしく生活していく。そのための支援をしたいですね」と笑う齊藤さんの周りには、思いをともにする人や組織が、集まりつつあるようです。

CLARTE *PEOPLE 3*

誰もがくつろぐ新しい、町のお風呂屋さん

－ユニバーサルな、コミュニティ銭湯、完成間近－

御谷湯（みこくゆ）
東京都墨田区石原3丁目30-8
（※2015年5月にリニューアルオープン予定）

左：伊藤 林さん 右：ボーン・クロイドさん

東京都墨田区、錦糸町駅からバスで5分、そこから徒歩2分で「御谷湯（みこくゆ）」に着きます。地元の人に愛されてきた銭湯は、実はただいま休業中。リニューアルオープンに向けて、建て替え中なのです。

御谷湯主人・伊藤 林さんは、墨田区では有名人。銭湯主人としての顔だけでなく、NPO法人「雨水市民の会」の事務局長として、墨田区内の雨水利活用を推進する事業をしています。御谷湯の手洗いや池の水は、雨水をリサイクル。さらにコインランドリーにはリサイクルコーナーを併設。近所の人が不要になった資源ゴミや使用ずみ乾電池の回収もしています。そんなこともあって「御谷湯」は、古くから「エコ銭湯」として親しまれてきたそうです。とにかく、墨田区を愛し、墨田区になにか貢献できることはないかと、いつも探していらっしゃる伊藤さんが、老朽化の進んだ御谷湯を前にしたとき「この銭湯を、福祉銭湯として生まれ変わらせよう」という考えが出てきたといいます。「銭湯は時代遅れ、右肩下がりの市場と言われています。施設の老朽化を理由に廃業する銭湯も少なくない。でも私は、銭湯にはまだまだ地域にとって果たすことのできる役割があると思っているんです」。その一つが、高齢者・要介護者の入浴。特別養護老人ホームや介護施設では、入浴施設が不十分なところも少なくありません。また、そうした施設では、家族と一緒に入浴することはできません。これからますます増えていくであろう、高齢者や要介護者の入浴。その地域ニーズに応えようというのです。

具体的には、5階建てのビルに建て替え、一般入浴者のためのお風呂は、最上部の4階・5階に。低層の住宅地に囲まれた御谷湯、窓からスカイツリーを眺めながらゆったりと湯船につかることができます。一方で、アクセスのよい1階には、高齢者・要介護者のための「ユニバーサル銭湯」を新設。家族風呂として夫婦や親子で入浴できるようにします。

リニューアルされる御谷湯には、障がい者もかかわることになっています。声をあげたのは、ボーン・クロイドさん。日本人とドイツ系アメリカ人のハーフのボーンさん、今は江戸川区のNPO法人に勤務されています。「もともと伊藤さんと一緒に、銭湯の清掃を障がいのある人の仕事として請負事業化していました」。その連携を推し進め、新しい御谷湯の2階に、自ら新しく就労継続支援B型施設を作ることを決意しました。「御谷湯の清掃業務も請け負いますが、ここをベースに、地域の細かいニーズを拾って事業展開をしたい」と言います。高齢者の買い物支援や街の清掃など、これからの地域課題を解決するために、障がい者の力を役立てようというのです。「エコ銭湯」から「コミュニティ銭湯」へ。障がい者の力も生かしながら、御谷湯は街の中で、新しい役割を担おうとしています。

CLARTE *PEOPLE 4*

フレンチと、藍染と、ハープの音色と。

－障がい者も働く、本格フレンチレストラン－

レストラン・アンシェーヌ藍
http://www.ancienne-ai.aikobo.or.jp/

「お待たせしました」。目の前に供されたのは、本格フレンチのランチコース。オードブル、スープ、サラダ、肉、あるいは魚のメインディッシュ。食後にはコーヒーか紅茶に、デザート。どれも味は確か。これがランチで2,484円（2015年2月時点）とは、お値打ちです。シェフは、東京會舘で調理長を務めた経歴をお持ちですから、その味にも納得です。と、グルメ雑誌のようなイントロダクションですが、『クラルテ』が取り上げるのには、もちろん理由があります。東京・三軒茶屋にあるフレンチレストラン「アンシェーヌ藍」は、障がい者が働く、就労継続支援B型事業所でもあります。先ほど料理をサーブしてくれたウェイターも、利用者なのです。

食事を終え、デザートをいただく頃に、ハープの音色が聴こえてきました。利用者の一人が演奏する「となりのトトロ」のテーマソング。毎週木曜日は、ハープ演奏の日になっていて、プロの演奏はもちろん、時にはこうして、利用者の演奏が楽しめることもあるそうです。演奏を楽しみに、木曜日に訪れる常連さんも少なくないといいます。

「アンシェーヌ藍」を運営するのは「社会福祉法人藍」。名前の通り、藍染工房を運営していて、そこでも障がいのある人たちが働いています。「アンシェーヌ藍」では、シェフやウエイター、ウエイトレスのユニフォームに「藍工房」でつくられた藍染のスカーフやエプロンが使われています。

藍工房から、飲食業へ。マネージャーの大野さんに、レストラン「アンシェーヌ藍」が誕生したいきさつを聞いて、理事長・竹ノ内睦子さんの思いに触れることができました。「もともとは、一人の利用者の『レストランで、ウエイトレスをしたい』という夢をかなえることからはじまったんです」。

ご自身も車いすを利用する障がい者である竹ノ内さん。1983年に「藍工房」を立ち上げたのも、出会った脳性麻痺の女性に「働く場所が欲しい」と訴えられたことがきっかけだったそうです。「藍工房」の利用者の思いを受けてレストラン設立を決意したときも、「どうせやるならば本格的なものを」と、無理を承知で銀座の本格フレンチの門をたたき「そのレストランの2階のテーブルの1つを使って、そこに自分たちでお客さんを呼んで、自分たちで接客をする」という条件で、数年間接客を学びました。自信をつけた竹ノ内さんは、満を持して2009年に「アンシェーヌ藍」を開店。

「やりたい」という気持ちを受け止めてはじまった「アンシェーヌ藍」は、そこで働く障がい者にとって、「夢を実現する舞台」になっているのかもしれません。